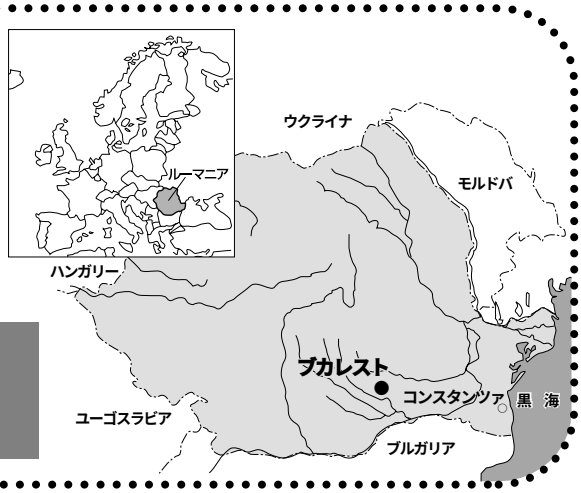
「ユニセフ子ども物語」

地球に生きる子どものくらし

Romania

ルーマニア



黒海からのひんやりした風が秋の訪れを知らせています。コンスタンツァの町をいろどりはじめた街路樹の向こうの家から子どもたちの声が聞こえてきました。

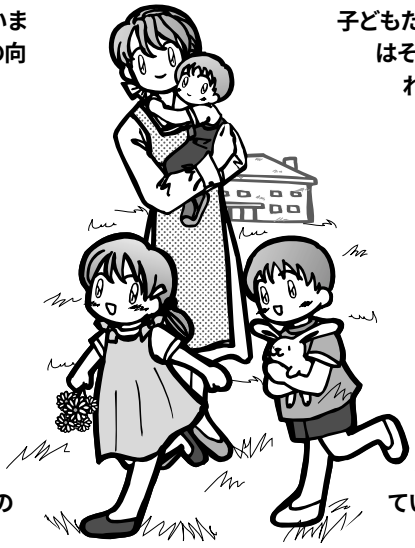
ここは「カーサ・スペランタ」―希望の家―。

「アレクサンドラがまたむずかってる。」

イリンカは小さなアレクサンドラの横に座って、ねころがっているアレクサンドラの足をくすぐります。「立って歩くこともわすれちゃったの？」

アレクサンドラはキャッキャッと笑い出します。「アレクサンドラはあなたをお姉さんと思ってるのね。」 ルプ先生がにっこりとしました。

アレクサンドラのからだにはＨＩＶ*という名前のウイルスがいます。そして「希望の家」にいる30人の子どもたちみんなにこのウイルスがいます。ウイルスはそのうちにエイズという病気を引きおこすおそれがあります。



このウイルスはふつうに生活していれば、うつるものではありません。それに病気がおこるまではウイルスをもっていても元気に生活することができます。なのに、こわいという気持ちのあまり、人びとはウイルスにうつった子どもたちをみすてしまったのです。医者でさえ、ウイルスをもった子どもは病院に入れておくように、と言っていました。アレクサンドラも3歳のときに「希望の家」へくるまで、だかれたことも、ほおずりされたこともなく、ただ、ゆりかごの中にねかされてすごしていました。

カーサ・スペランタの子どもたち

だから、今でもときどきアレクサンドラは起きあがるのを忘れてしまったように、ねころがったまま泣き出します。「希望の家」では、お母さんがわりの先生と5、6人の子どもたちが家族のようにくらしています。アレクサンドラがむずかると、ルプ先生はアレクサンドラをだきあげ、ほかの子どもたちの上で「ほうら、お友だちがいっぱいいるよ」 と言いながらぶらんぶらんゆすってくれます。そうしてアレクサンドラは安心したように笑い出すのです。

● ● ● ● ● ● ● ● ●

イリンカは今年8歳になりました。イリンカのウイルスはもうエイズという病気をおこしはじめています。イリンカはだんだんやせて、ときどき肺炎を起こします。けれど、どんなに調子が悪くてもイリンカは毎日学校へ行きたいと言ってルプ先生を困らせます。「イリンカ、もうすこし調子がよくなるまで待ちなさい。また学校には行けるから。」

でも、イリンカはいつか学校に行けなくなるのではないかと心配なのです。「希望の家」の居間には子どもたちの写真がたくさんかざってあります。イリンカとアレクサンドラも写真の中で笑っています。けれど、写真にうつっている子どもたちのうち、12人がもうここにはいません。イリンカも、いつかいなくなってしまうのかしら、自分も死んでしまうのかしら、と不安でたまらなくなります。学校に行っていればきっとだいじょうぶ、そんなふうにイリンカは思っていました。

イリンカが学校へ行きはじめたとき、みんなイリンカと話もしてくれず、なかには石を投げてくる子までいました。けれど、担任の先生はよく病気のことを知っていて、イリンカを他の子と同じようにかわいがりました。だんだんクラスのみんなも、イリンカはみんなとおんなじだ、ということに気づいて、イリンカの友だちになりました。

今度の日曜日、イリンカはクラスメートのナディアの誕生日パーティーに呼ばれています。招待状をもらった日、イリンカはうれしくって眠れませんでした。今日、ナディアがイリンカのおみまいにきました。

「元気になって、日曜日にはこれるよね。」

「うん。明日になれば、調子がよくなって、きっと学校へも行ける。」

ナディアがもってきてくれた大きな黄色いはっぱのにおいをかぐと、少し元気になるような気がします。小さなアレクサンドラもイリンカのベッドのそばへやってきて、心配そうにのぞきこみました。

「すぐ元気になるからだいじょうぶ。あなたも学校へ行って、たくさんお友だちをつくるのよ。きっと楽しいことがたくさんあるから。」

（文：日本ユニセフ協会）

*ＨＩＶ： エイズ（後天性免疫不全症候群）を引き起こすウイルス

広がるHIV/エイズの脅威

世界の子どもたちHIV/エイズ

UNAIDS（国際連合エイズプログラム）の統計によれば、1996年末時点で2300万人以上がＨＩＶに感染またはエイズを発症しており、毎日新たに8500人がＨＩＶに感染しています。このうち90%は開発途上国に住む人びとです。

そして、このＨＩＶ/エイズが世界の子どもたちに深刻な影響を与えはじめています。1996年だけで15歳未満の子ども40万人が新たにＨＩＶに感染、1996年末までに累計で83万人がＨＩＶに感染しました。また、1996年にエイズを発症して亡くなった150万人のうち35万人が15歳未満の子どもでした。子どもはおとなよりも短期間でエイズを発症し亡くなります。開発途上国では、貧困や生活環境の悪さから発症までの時間は先進工業国よりも1年短いと報告されています。

両親をエイズで失う「エイズ遺児」も急増しています。1996年半ばまでに900万人の子どもたちが母親をエイズで失い、なお数百万人がエイズを発症もしくは発症の恐れのある両親とくらしています。

©WHO/L.Gubb

タンザニア国内にある子どものための施設。この施設にいる子どもの半数以上は"エイズ遺児"です。

感染の原因

現在、子どもの感染の90%は母から子への母子感染です。ＡＺＴという治療薬を服用すると胎内感染の割合が減ることがわかっていますが、開発途上国では多くの患者にとってあまりにも高価な薬です。また、母乳からの感染については、母乳からＨＩＶに感染する割合よりも、母乳育児を避けることで子どもが栄養不良や下痢で命を失う割合の方が高く、ぎりぎりの選択を迫られています。これについては母親がビタミンＡを十分摂取することで感染率が低下することがわかっています。

また、性的搾取や性的虐待が原因となるケースも増加しています。現在性的搾取の被害を受けている子どもの数は正確にはわかっていませんが、性産業で働かされている子どもやストリートチルドレンのＨＩＶ感染率が非常に高いことが指摘されています。

©UNICEF

ルーマニアの子どもたちとHIV/エイズ

ヨーロッパのＨＩＶ感染児の54%がルーマニアに集中しています。ルーマニアの場合、35%が汚染された注射針から、23%が輸血から、15%が母親から、の感染です。1989年以前、孤児院や栄養不良児のための施設にいた子どもたちは、“栄養強化のため”の輸血や抗生物質などの注射を頻繁に受けていました。当時、輸血されていた血液は検査されておらず、注射針も使いまわされていました。そのため、こうした施設にいた子どもの多くがＨＩＶに感染する結果となったのです。1995年に発表されたデータによると、当時ルーマニア国内にいた2291人のＨＩＶ感染者のうち、2087人が子どもでした。

エイズに対する知識の欠如から、感染者に対する偏見が根強く、ＨＩＶ感染児の支援には多くの困難が伴いました。ＨＩＶ感染児を普通の学校に通わせることに成功したカーサ・スペランタのムリナックス校長は、次のように語っています。

「ここの子どもたちは少なくともひとりぼっちで死ぬことはありません。私たちは、ＨＩＶに感染した子どもたちだって一人の子どもに変わりはない、ということを伝えたいのです。」

©UNICEF

ルーマニア国内にあるHIV感染児のためのホスピス

一人の子どもとしての当たり前の権利を守ろうとするカーサ・スペランタのモデルはようやく広がりつつあります。ユニセフは保健省と協力して、医師や看護婦のトレーニング、予防をよびかけ適切な手当てをするための保健員の養成、民間団体の運営するＨＩＶ感染児やエイズ遺児のための施設への支援などを行っています。

これに対処するために

- あらゆる方面、あらゆるレベルにおける ＨＩＶ／エイズの予防および治療についての知識の普及
- 感染児が治療、教育、社会サービスなどを受ける権利の保障
- 胎内感染や母乳からの感染など母子感染を極力避けるための努力、特に女性のＨＩＶ感染からの保護
- エイズ遺児に対する支援の充実
- 子どもたちの性的搾取、虐待、麻薬からの保護

などが急がれており、ユニセフも各国で事業を開始しています。

©UNICEF/HQ97-0069/Jeremy Horner

インド・ゴア州では学校の授業の中でHIV/エイズについて学習しています。近くの女子校でも同じような授業が行われています。➡

⬅タイでは、学校内外、職場、地域など様々な場所でHIV/エイズについての教育がはじめられています。

タイ北部のチャンライ市の学校で、大きな紙にHIV感染の危険について書き出し、学習する生徒たち。

©UNAIDS/Simon Mathey